

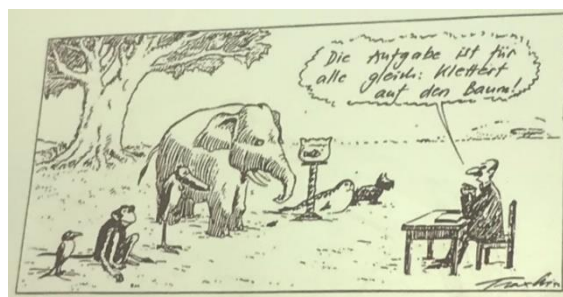
教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 入善町立入善中学校・教諭・角丸 映至
- 2 研修期間 令和元年9月15日（日）～令和元年9月23日（月） 9日間
- 3 調査研究課題 ヨーロッパ諸国の教育、芸術、文化、社会事情等の調査研究
- 4 研修機関等 ドイツ：ザンクト・ペーター小学校訪問
アルブレヒト・デューラー専門学校
デュモンド・リンデマン共同基幹学校
在デュッセルドルフ日本国総領事館
デュッセルドルフ手工業会議所
ベルギー：EU議会
フランス：オルセー美術館
ルーブル美術館
- 5 研修の概要（主な視察・訪問先にて）

現在、富山県においても日本語を話すことができない外国籍の生徒の数は増加している。私自身も授業で接する機会は以前より確実に増えている。移民が多く生活しているドイツにおいて、様々な人種や母国語をもつ子どもたちが一つの教室で学んでいる光景は、今後の日本でも起こりうる光景なのかもしれないと感じた。今回の視察において、多様な文化の中で、互いを認め合いながら生活しているヨーロッパの多様性を見ることは今後、教員として様々な価値観をもつ子どもや保護者と接するうえで、大きな財産になると考え、視察に臨んだ。

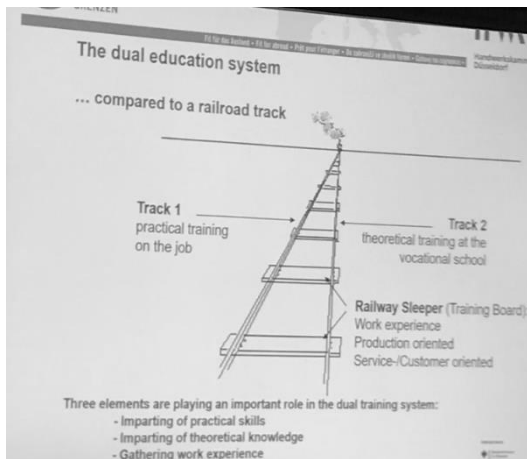
最初の視察地、デュッセルドルフでは日本国総領事館を訪れ、ザンクト・ペーター校などの教育施設を視察できた。日本国総領事館ではドイツの教育制度や課題についての講義をいただいた。ドイツでは州に初等教育への権限があるとのことであった。また、ドイツは高齢化は進んでいるものの、少子化は問題になっていないとのことだ。移民が多く、人口は増加しているようである。つまり、生産年齢人口は減少している訳ではなく、日本との違いを知ることができた。

ザンクト・ペーター校では、初等教育の様子を見ることができた。各教室では少人数での授業が行われていたのが印象的であった。入学して3週間余りのクラスを見せていただいたときには20人程度の児童に2人の教師がついている様子を見ることができた。決まった座席というよりは、教師の回りに自由に座って話を聞いている様子であった。また、初等教育段階での特別なキャリア教育は行っておらず、卒業後の進路は家族で決定するのが一般的ということであった。その文化が根付き、学校教育と職業教育が並行して進められていくデュアルシステムが確立されたドイツでは自然と職業観が身に付いていくのだと感じた。



今回視察した学校では、ドイツ語ができない移民の子どもたちに対して、ドイツ語教育を時間を掛けて行っているとのことであった。ドイツ語を習得してからカリキュラムを進めていくため、明らかに年上と思われる生徒も同じ教室で学んでいる様子が見られた。言語の学習に時間を掛けて行い、ドイツ社会に適応させることが教育の一つの目的になっているのだと感じた。移民を受け入れ、労働力として育てていくことがドイツの職人制度や経済を支え、ドイツ社会が、持続していくために必要なことなのだと思う。少子化が進み、労働力が減少していくことが考えられる日本社会においても今後起こりうる小・中学校での教育の様子なのではないかと考えさせられた。

ドイツのデュアルシステムと日本の学習指導要領に基づいている教育システムを一概に比較するこ



とはできない。また、その下で行われるキャリア教育についても違いがあるのは当然である。しかし、地域、企業で就職前の段階から人を育てていこうという考えは大切なことだと感じた。地域、企業の力を借りて、児童生徒を育てていくことは、学校側、企業側にとっても大きなメリットがあるように思う。学校とその後児童生徒が活躍していく社会とを結び付け、社会で生きていくための力を身に付けることができるようにしていくことが必要である。

今回、幸運にも富山経済同友会の方々とご一緒させていただく機会をいただいた。これを機に、富山でも早い段階からの産学連携を進めていけるように、少しでも力になることができればよいと思う。また、その一役を担っていけるように今後もこのご縁を生かしていきたい。

ヨーロッパの都市を巡り、街並みや美術館、教会を見学して感じたことは、古今東西、人間として美しいものや荘厳なものを感じる心は普遍であるということだ。数百年前の人々もきっと、私たちと同じ絵画や彫刻、教会を見て、美しいと感じたのではないだろうか。これまで芸術に関心のなかった私自身が絵画や彫刻を見て、当時の世の中に思いを馳せたり、作者の生活を考えてみたりすることで、人間がもつ、変わらない心を考えることができた。時代も場所も異なる生活を考え、思いを考えた経験は私自身の見方を広げる機会となった。

EU議会、美術館の視察は社会科の授業の中で、すぐに活用できるものであり、生徒に紹介できるものであった。自分が見てきたものを感じたことを交えながら伝えたり、生徒が考える材料にしたりすることでより身近なものとして学ぶことができるのではないかなと思う。これからの国際社会を生きていく子供たちが、世界をより近いものとしてとらえてもらえるようにしていきたい。

古い建造物が建ち並ぶ街の中に環境に配慮された電動スクーターが走る様子は、伝統を大切に、新しいものを受け入れる寛容性が感じられた。また、街角のスーパーでは日本をはじめとするアジア各国の食材が売られており、国際化が進み、異文化が自然と身の回りにある環境が見られた。そのような環境が多様性を受け入れる土壌となっているのであろう。

変わらないものと時代に即したものの、教育の不易と流行を考える機会となった。アクティブ・ラーニングやプログラミングの思考など新しい言葉が出てくるが、教育の根底にあるものは変わらないことを忘れてはいけない。この派遣事業の中で「よりよく生きる」ためには教育が必要であるという話をいただいた。日本とは異なる地で多くの本物に触れた経験は私の視野を広げてくれることにつながった。



帰国した翌日、いつもと変わらない教室でいつもと同じ一日がスタートした。いつも通りの日常ではあったが、目に映る教室や生徒から新鮮な気持ちを得ることができた。生徒に掛ける言葉もどこかいつもとは違う気がした。9日間の視察が私の視野を広げ、視点を変えてくれたのだ。今回の視察を通し、好奇心をもち、いろいろな分野に関心をもち、学ぼうとする姿勢や行動力を身に付けたいと感じた。その姿を生徒に見せることが生徒への刺激になっていければよいと思う。教師が変われば生徒も変わる。私自身がこれからも様々な経験をし、興味をもち、行動することで、成長し続け、生徒がよりよく生きていけるように教育に携わっていきたい。

最後に、このような研修の機会を与えてくださった方々に感謝し、この研修で得た経験を今後の教育活動に生かし、富山県の将来を支える子どもたちの育成に今後も精一杯取り組んでいきたい。